

令和3年度第4回全史料協大会・研修委員会 会議録（概要）

日時：令和4年2月9日（水） 9時～15時

開催方法：オンライン方式

出席者：吹屋委員長、長谷川副委員長、新井委員、蓮沼委員、藤委員、加藤委員、
青木委員、三宮委員、大月委員、滋賀県立公文書館秦副館長（オブザーバー）、
事務局（山崎・吉田・山本）

1. 開会

2. 委員長あいさつ

3. 協議

(1)令和3年度事業報告・決算報告について

- ・それぞれ事務局より説明し承認された

(2)第47回全国（高知）大会の総括について

※オンライン形式で開催された全国（高知）大会について振り返り、今後の大会運営について協議した。主な意見は以下のとおり。

①業者委託について

- ・オンライン大会を開催するにあたり、機器の準備、設置、当日の配信管理業務等を業者に委託した。トラブル対応の面で安心感があった。委員ではその対応は難しい。
- ・機器の追加があり委託料が当初予算を超えるなどしたが、オンライン大会を開催すればどれくらい費用がかかるのかについて、情報を共有するとともに、貴重な経験値として次回以降の大会に活かしていくことが大事。

②オンライン大会における委員等の配信会場入りについて

- ・新型コロナウイルス感染症への対策もあり、司会者のみが会場入りしたが、画面を通してではなく報告者と対面で打ち合わせができたことは、議論を進める上で大きかった。
- ・現地会場の負担が大きかった。オンライン開催であっても、現場での仕切りは必要であり、委員の現地入り等を検討すべきではないか。

③委員の負担の増大について

- ・当初想定した以上に、オンライン大会開催に起因する業務の負担感があった（入室管理業務における終日張り付きや大会受け付業務等）。実際に経験してみて分かったことであり、委員の負担に関しては来年度以降考慮すべき。

④参加人数について

- ・思ったより参加者が少なかったと感じる。毎年参加している人の中でも、参加しなかった人がいるが、それらの人がなぜ参加しなかったのか、その理由を分析するべき。
- ・「参加人数としては報告していないが、職場でパブリックビューイングで見れていた」と言う声も多く聞かれた。実際には、把握されている人数よりもっと多くの人が参加したのではないかと。オンライン大会における参加者人数のカウント方法を検討すべき。

⑧ハイブリッド方式の検討

- ・通信回線上のトラブルが不安視されていたが、結果として大きなトラブルは発生しなかった。来年度以降も同様のやり方をするのであれば、それほど大きな修正は必要ないと思われる。ただ、コロナが落ち着いて来た時には、対面とオンラインを併用するハイブリッド方式をどう考えるかの議論が必要となる。

⑨開催地における大会の成果

- ・「高知で大会を開催することができ、ミュージアムネットワークに注目していただいたおかげで、自分たちの取り組みに自信を持つことができ感謝している」、との感想が開催県からあった。

⑩交流会の持ち方

- ・ブレイクアウトルームによる交流会は、昼の時間は昼食休憩と重なり、特に初日はほとんど利用されていなかった。また、夜の交流会についても、人が入っていないと入りづらいのか、一つの部屋に集中するなどした。テーマを決めて部屋を分けておくとか、委員が各部屋に1人ずつ入っておくなどした方が良かった。

⑪大会冊子の作成および資料代の徴収について

- ・オンラインで大会を開催する時に限っては、資料配布はPDFでのダウンロードとし、冊子の印刷はせずに、資料代も取らないというのはどうか。会員外の人でも無料で参加できれば、全史料協のPRにもなり、会員増にもつながるのではないかな。
- ・この問題は、大会冊子を作る意味や全史料協会費の徴収にも関わり、簡単に結論が出る問題ではない。当面、今年同様に印刷するという前提で予算を組んでおき、継続審議とする。それとともに、全史料協としてこの問題をどうとらえるのかを検討していく必要がある。

(3)令和4年度事業計画・予算案について

- ・それぞれ事務局より説明がなされた。
- ・「事務局事務費賃金」について、昨年度7日分の執行しかないが次年度予算で額が増加している点について。

→日数は同じだが、2700円の増額は、1日あたりの単価が上がったため。令和3年度は、オンライン大会開催の技術的な業務補助に予算が付けられていたため限定的に執行し少ない日数となった。実際には技術的な専門業務というよりも、オンライン大会ならではの事務業務が増えた。今年度はその面を補助していただけるよう「事務局業務補助」とした。

(4)第48回全国（滋賀）大会について

- ・長谷川副委員長より、第48回全国（滋賀）大会企画案について概要説明があり、滋賀大会開催について協議した。前提となる条件については、①開催自治体は滋賀県、②開催主体機関は滋賀県立公文書館、③開催方式はオンライン（高知大会に準拠）、④プログラム構成は単線型が望ましい。以上の点を踏まえて協議した。

①大会会場について

- ・十分な部屋の広さがあり、Wi-Fi による無線接続ではなく有線 LAN で安定的につながられる条件を満たす場所を検討することとした。委員の現地入りを考えた場合、メイン会場を含めて3部屋が必要。

②大会テーマについて

- ・公文書管理条例下の公文書館として目立った活動が見え、認証アーキビストについても上手に取り入れている滋賀県立公文書館の特色が活かされる様な内容としたい。滋賀県立公文書館と協議をしながら、5月の委員会までに決めていく。

③大会構成について

- ・滋賀大会の大枠をどうするか、また研修内容として盛り込むべき内容等について協議した。具体的には次回委員会で詰めていくこととした。

i) 認証アーキビストの現状と課題

ii) アーカイブズ入門（電子公文書について）

iii) 調査・研修委員会からの報告

iv) ブレイクアウトルームを利用した交流会・ポスターセッション・企業展示

(5)第 49 回以降の全国大会について（報告）

- ・第 49 回大会（令和 5 年）については、仙台大会の予定で進められてきたが、仙台市公文書館の開館時期との関係で、大会開催が難しくなった。これに代わる開催候補地について現在検討中。

5. 閉会

以上